『患者さんとご家族からの大切なおくりもの』

大切な方を亡くした時、患者さんのご家族の悲しみや喪失感は計り知れないものがあると思います。私たち医療者もまた喪失感でいっぱいになります。緩和ケア認定看護師としてまだできることがあったのではないか、他に方法はなかったかなど振り返ることも度々です。確かなことは、最期に寄り添わせていただく中で、患者さんのこれまでの生き方や大切にしてきたこと、様々なご家族の形など、大切なことを学ばせていただいていることです。どの方の人生も素晴らしくかけがえのないもので、どんな最期もその方らしく精一杯生きた証だと思います。

最近旅立たれたある患者さんは、「旅行が好きでご夫婦や姉妹で国内や海外、様々なところへ行ったの。子供たちも優しく立派に育った。人生を全うしたので悔いがないの」と穏やかにお話してくださいました。次々に現れる終末期の苦痛を感じながらも嘆くことは少なく、医師や看護師に多くの感謝の言葉をくださいました。かなり厳しい病状ではありましたが担当医師や看護チームの連携で何度かの外泊と退院を果たされ、ご家族にも「悔いがないこと」「家族への感謝」を伝えられたと嬉しそうに教えてくださいました。こんな風に穏やかで潔く生ききれたらよいけれど、私にはできるのかなと思いながらいつもお話を聞かせていただいていました。最期は穏やかに眠るように旅立たれ、ご家族も悲しみの中でありましたが、精一杯生きた患者さんに誇りをもっておられたと感じています。私も、母として人生の先輩としてとても尊敬しており、忘れられない患者さんの一人です。

また、別の患者さんで私と同年代の患者さんがいました。「やりたいことはなにかありますか」と聞いた時「色々あったけどね、もうできないことが多い。自分は料理が好きで、得意なメニューのレシピを作っているから、お嫁さんに託したいなって思っているの」と教えてくれました。お子さんたちは仕事や子育てでとても忙しい年代で、やや遠方に住んでいるので、直接大切な話をする機会は限られているようでした。年末からお正月にかけて一時退院することができ、ご家族水入らずでとても楽しい時間を過ごされたとのことでした。患者さんもご家族も予後が少ないことをわかっていましたが、あえて楽しい時間を過ごすために深刻な話はしなかったようでした。患者さんはその時間を振り返り、「これまで仕事が忙しくこんな時間を過ごすことができなかった。本当に楽しかった。」と話されました。具体的なお別れや感謝の言葉がなかったけれど、永遠に心に残る宝物のような時間を過ごされたのだと思います。この方も静かに旅立たれて、またお会いしましょうと心の中でお伝えしました。

『旅立たれる方は、私たちの教師であり、希望の灯であり、この世の果てを見せてくれる大切な存在です』というアメリカのナースの言葉を、私は大切にしています。これまで患者さんの人生にふれ、聞かせていただいたお話は『大切なおくりもの』として心に刻み感謝したいと思っています。

例外なく誰にでも訪れる最期の時に、どんな景色が見えるのだろうか、自分はどうありたいかと考え続けることができるのは、『大切なおくりもの』をいただいたからと思っています。

そろそろ桜の季節です。桜の季節に逝きたいな・・なんて夢のようなことを考えたりする日々です。

緩和ケアチーム　緩和ケア認定看護師
北野由紀